# 日本介護福祉学会通信 No. 84

2024年12月発行
発行：日本介護福祉学会　The Japanese Association of Research on Care and Welfare
〒162-0801　東京都新宿区山吹町358-5　（株）国際文献社内

## 第11期　会長就任のご挨拶

## 「介護福祉学のさらなる発展に向けて」

日本介護福祉学会会長　鈴木　俊文

このたび、日本介護福祉学会の第11期会長に就任いたしました、静岡県立大学短期大学部の鈴木俊文です。2024年8月25日に開催されました総会において、この大役をお引き受けすることとなりました。2024年は、学会創立30周年という重要な節目であり、この記念すべき年に会長を務めることの重責とともに、未来への責任を強く感じております。介護福祉学のさらなる発展に向けて、理事・学会員の皆様と共に全力を尽くしてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、本学会では、日本介護福祉学会30周年記念事業として行われた歴代会長による対談企画や、学会通信・介護福祉学デジタルコレクション、そして2025年発刊予定の30周年記念出版を通じて、これまでの学会の歩みと現在の到達点、将来の展望を明確にいたしました。本学会は設立当初から、「生活」や「支援」といった重要な概念を中心に据え、介護福祉学が持つ学際的な特質を最大限に活かしながら、多様な課題に対する深い洞察を積み重ねてまいりました。この礎の上に、現在本学会が取り扱う研究領域は以下の7つにわたります。

「理論・制度・歴史」
「介護運営管理」
「高齢者や障害児・者の介護」
「家族介護・在宅介護」
「生活支援技術・方法」
「介護福祉教育・人材育成」
「災害・介護福祉」

これらの領域は、超高齢社会に加えてデジタル化、国際化が進展する現代において、ますます重要性を増しており、介護福祉学の果たすべき役割がさらに大きくなることは間違いありません。持続可能な福祉社会を、次世代に確実に引き継いでいくことも、私たちに課せられている使命です。

現代、近未来における多様な課題に対応するためには、学会内外の連携がこれまで以上に重要です。学会員同士が知見を共有し、さらに介護福祉の現場とも強固なネットワークを築きながら、介護福祉学の発展に寄与する必要があります。本会では、委員会や地区理事を中心に全国各地で様々な活動を展開しています。今後は、さらに国内外におけるさまざまな機関等との連携や組織的なプロジェクトを強化し、学際的なアプローチを通じて、社会課題への対応と新しい知見を創出し、実践に還元していくことが、本会の使命であると考えています。

私自身も、この重責を果たすために、常に学会員の皆様と連携し、共に成長しながら、介護福祉学の価値をさらに高めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

第11期会長　鈴木俊文

# 理事・監事選挙結果と第11期理事及び幹事

## 2024年度 日本介護福祉学会 理事・監事選挙の結果について

日本介護福祉学会選挙管理委員会
委員長　二瓶　さやか
委　員　小平　めぐみ
委　員　相馬　大祐

「2024年度　日本介護福祉学会 理事・監事選挙」について、開票を行った結果、得票順位が確定いたしました ので報告します。

記

1. 公示日　2024年 4 月 26 日
2. 投票期間
　5月 21 日(火)13:00～6 月 20 日(月)13:00
3. 投票上限　理事 5 名以内、監事 2 名以内
4. 方法　インターネット選挙
5. 開票場所　インターネット上
6. 結果

(1)選挙人の数　820 名
(2)投票総数　176 票
(3)有効票数　176 票
(4)無効票数　0 票
(5)投票率　21.46 %

全てインターネットでの投票であり、
郵送による投票 は無かった。

## 第11期（2024～2027年度）理事及び監事

| （役職） | （氏名） |
|---|---|
| 会長 | 鈴木　俊文 |
| 副会長 | 木村　あい |
| 事務局長 | 武田　卓也 |
| 事務局次長 | 柊崎　京子 |
| 庶務 | 午頭　潤子　堀江　竜弥 |
| 会計 | 八木　裕子 |
| 公開講座 | 棚田 裕二　早坂 聡久　渡辺 裕美 |
| 広報・ニュース | 二瓶　さやか |
| 学術会議 | 中村　裕子　笠原　幸子 |
| 学会誌編集 | 畑　亮輔　笠原　幸子 |
| 研究活動支援 | 篠崎　良勝　本名　靖 |
| 研究倫理 | 川廷　宗之　本名　靖 |
| 将来構想 | 事務局全体(鈴木、木村、武田、柊崎、午頭、堀江、八木) |
| 国際交流 | 伊藤　優子　二渡　努 |
| 論文賞選考 | 鈴木　俊文　木村　あい<br>武田　卓也　畑　亮輔 |
| 北海道地区 | 池森　康裕 |
| 東北地区 | 中村　裕子 |
| 関東地区 | 午頭　潤子　二瓶　さやか |
| 北陸・信越地区 | 岡田　史 |
| 東海地区 | 及川　ゆりこ |
| 近畿地区 | 久保田　寛 |
| 中国・四国地区 | 棚田　裕二　辻　真美 |
| 九州・沖縄地区 | 坂本　毅啓 |
| 監事 | 下垣　光　結城　康博 |

# 第32回 日本介護福祉学会大会のお礼

## 科学的介護を見据えた介護福祉学の到達点
## ～ 全人的介護と科学的介護の調和に向けて ～

大会日時　2024年8月25日（日）　9:30～16:30

第32回日本介護福祉学会大会
北星学園大学　社会福祉学部
社会福祉学科　准教授　畑　亮輔

第32回日本介護福祉学会大会を8月25日（日）に開催しました。コロナ禍以来、5年ぶりとなる参集での大会でしたが、合計170名の方々にご参加いただき、盛況のうちに終えることができました。2020年以降のコロナウイルスの感染拡大は、特に基礎疾患を有していたり、要介護等の状態にあったりする人々にとって大きなリスクとなり、介護福祉を研究領域とする本学会では細心の対応が求められてきたといえるでしょう。しかし、感染予防として大会を非開催としてきたわけではありません。学会員の皆様の努力により、2020年度以降も非対面（オンライン）形式にて大会を継続してきました。そのバトンを受け継ぎ、今回、参集による大会を無事に開催することができ、安堵しています。

大会テーマは「科学的介護を見据えた介護福祉学の到達点 ～全人的介護と科学的介護の調和に向けて～」でした。ICTやロボティクスの導入、LIFEに代表されるビッグデータの活用など、科学に基づいた介護福祉の展開がますます求められてきている現状において、介護福祉学はどのように答えることができるのかを考える機会にしたく、このような設定としました。

大会プログラムとしては、最初に大会の趣旨説明もかねて「介護福祉学の構築と科学的介護」をテーマに大会長講演をする機会をいただきました。その後、学会企画シンポジウムとして「介護福祉学の到達点と将来像」をテーマに、本学会30周年記念として発刊予定の書籍の内容について、加瀬会長をはじめとする学会理事の皆様にご登壇いただきました。午後から実施したのが自由研究発表です。1演題15分（10分発表、5分質疑応答）と決して長い時間ではありませんが、64演題ものご登録をいただき、学会員の皆様の研究について活発な議論をいただくことができました。最後に、大会企画シンポジウム「科学的介護が照らす全人的介護への道～科学的介護の具体的取り組みから～」を開催し、介護福祉現場で実践されている科学的介護とアカデミックな視点に基づく科学的介護とをすり合わせることで、介護福祉学会が大切にしてきた全人的介護と科学的介護との関係性を明確化することを目指しました。また、前日の24日（土）には「介護人材の確保と育成 ～量的確保と質保証のバランス～」をテーマとした大会公開講座を開催し、介護人材が不足する中で、どのようにして介護の量の質をバランスさせるのかを検討しましたが、こちらにも多くの方にご参加いただくことができました。

もちろん、反省点がないわけではありません。1日でのプログラムは慌ただしく、また夏休み期間で実習等の対応がある学会員の方も多かったようで、場面ごとの参加者数は合計数よりも少なくなる傾向にありました。また、介護機器の展示スペースの設置がなかったり、書籍販売も限定的になってしまったりと、参加者の皆様には物足りなさを感じさせてしまう場面もあったようです。しかし、その中でもやはり大会は学会の核となる重要な活動であり、大会の質の向上は日本介護福祉学会が今後も社会的な役割を果たしていくために必須であると確信した次第です。次年度以降も日本介護福祉学会が、日本における介護福祉をアカデミックな立場から推進していけるよう取り組んでいきたいと決意を新たにすることができました。

最後になりますが、本大会の開催にあたり多大なるご協力をいただきました後援諸団体の皆様、学会理事会・事務局の皆様、そしてシンポジスト等にご登壇いただきました皆様、そして何より本大会にご参加いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。このたびは誠にありがとうございました。

【第32回　日本介護福祉学会大会　実行委員会】

大会長 兼 実行委員長　畑　亮輔　（北星学園大学）

実 行 委 員　八巻貴穂　（北翔大学）
竹内美幸　（北翔大学）
山道祐子　（北翔大学）
竹田千春　（北翔大学）、
池森康裕　（北海道医療大学）
高橋由紀　（北海道医療大学）
林美枝子　（日本医療大学）
平野啓介　（日本医療大学）
織田なおみ（日本医療大学）
酒井賢一　（北海道介護福祉士会）

## 連載企画 「私と介護」(7)

# ―介護の心から介護福祉学―

住居　広士
（県立広島大学大学院・特任教授）
（第14回日本介護福祉学会大会長　2006年9月）

1995年度に地元の広島県三原市の県立広島保健福祉短期大学、2000年度に広島県立保健福祉大学、2005年度に県立広島大学大学院から2025年3月末に退任する。日本介護福祉学会を1994年10月23日に創設して理事に就任して、介護福祉学を探求した。介護福祉研究を1993年4月1日に、介護福祉学を1994年10月1日に創刊した。医師・社会福祉士・介護福祉士の国家資格を取得して、日本学術会議に2005年9月から連携会員に就任した。

○介護の心とは何か

介護することは、そもそも要介護者等に安らぎをもたらすことである。しかし介護をしていても、何も生じていないと感じ、要介護者等の心身をみだしているだけではないかと、途方もない不安を感じることがある。ヤスパース（Karl Jaspers，1883～1969）は「哲学とは何か」にて、「安らぎこそ哲学することの目標である。途方もない破壊のただなかにあって、われわれは存続するものを確実にしたいと願う。」と述べている。介護への不安は介護自体に起因しているのではなく、介護の支柱となる介護の心に課題があり、介護すること自体に確信ができないからではなかろうか。我々は介護福祉学を学術の中心として、介護の心の根源を探ってみる必要があるのではなかろうか。

さまざまな人生を歩んできた人々が介護を受けている。たとえ介護を要する身になっても、命のある限り尊厳を持って人生を全うしたい。介護者は介護に追われて、ただ介護を時の流れにまかせても、要介護者等を見捨てることなく介護して悩んでいる。介護の心を見失って、ただ生命と生活のためだけに介護をすることがある。それぞれの最後の限られた人生の中で、尊厳のある人生を描けるように、介護の心により人生の最後のテープを切るまでに、最善の介護を探求しましょう。

○介護の心を考える

介護は、尊厳のある生活を護り介（たす）ける。まもるというのは介護の「護」です。「介」というのは中国語でたすけるという意味です。介護は「尊厳のある生活を、介（たす）けて護る」のが介護の起源です。介護保険の実践現場には、利益の追求、幸福の追求、自由の追求、市場原理などが欲求されている。その狭間に残された要介護者等の方々を、介護の心で支えて、今後とも継続的に福祉を植え継いでいただきたい。

誰もが人間らしい生活をおくることができ、相応な介護が受けられる社会システムの構築をめざす介護の社会化を目的として、介護保険制度が2000

年度から開始した。介護が家族介護だけでなく、介護の社会化が行われることで、社会から介護を受ける制度になった。介護は生活それ自体に大きくかかわっているからこそ、介護を支える心に基づき、考えながら介護を実践し、介護の実践の中から介護の心も尊重する必要がある。21世紀の少子高齢社会では他者からの支えによってのみ自立して生活できる人がますます増えてくる。『介護福祉思想の探求』(編著、ミネルヴァ書房、2006年)の一部を加筆修正しながら、介護保険時代に向けた、新たな介護の心の構築に向けて探求したい。

○介護保険時代の介護の心のために

「介護」は日本から生まれた新しい誇るべき概念である。介護保険の先輩でもあるオランダやドイツや後輩の韓国などは、基本的には高齢者医療保険制度の補完である。北欧の高齢者ケアは、福祉サービスの一部である。医療からも福祉からも独立している「介護」は日本だけである。日本では介護保険制度が発足する以前は、介護は家庭内のみ、医療あるいは福祉の一部の補完として機能していた。

日本社会の少子高齢化に伴い、要介護者等が増大し、介護の期間が延長し重度化してきた。それに対して家族介護力の低下も伴い、家族の介護負担や経済負担は、もはや家族内の問題ではなく社会的な問題となった。介護の社会化という思想から、十分な介護が受けられる社会システムの構築をめざすことになった。少子高齢社会でだれもが安心して、みんなで介護を支え合う社会をつくるために介護保険が開始された。

1997年に成立した介護保険法の目的は、第1条で「その有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるよう、必要な保健医療サービス及び福祉サービスに係る給付を行う。」と定めた。いかに保健医療と福祉サービスを組み合わせても、自立生活を営むことができないから要介護者等になっているのである。

第2条「介護の目的」とは何かについて、もう一度しっかりと議論する必要がある。要介護者本来の「尊厳のある生活 (ROL: Respect of Living)」を護り介(たす)けることが介護の目的となるべきである2005年の介護保険法改正により、目的に「尊厳の保持を旨とし」と条文が修正追加された。尊厳の保持が目的となり、その実践として自立支援を行うことになった。しかし、尊厳の保持とは、尊厳のある生活の「向上および増進」を努めることになっていない。

○介護の心から介護福祉学

日本の近代における介護は、親につくす孝行の心だけでなく、特に上下関係を重んじる介護の心が育っていた。介護には上下関係という介護関係が潜在していた。介護による植福により、介護の心を支える介護福祉学を求めたい。

介護保険は決して魔法の杖ではない。介護保険があれば介護が十分に支援されるわけではない。逆に介護保険により、介護の心がしだいに失われつつある。医療保険と介護保険の医療介護の狭間で苦しむ要介護者等が多く生まれている。介護者らは、そのような状況でも、要介護者を見捨てることなく、日々介護しなければならない。介護保険をどのように活用すれば、介護保障できるか悩んでいる。介護保険時代だからこそ、介護の心にも介護福祉学で支援しなければならない。要介護者等の生命と生活のためだけに介護するのではない。それぞれの人生を最善の人生となり尊厳のある生活を護り介(たす)けるように介護を支援する必要がある。医療介護保険時代に押し流されることなく、どのような時代にも適用する介護の心を探求することで、介護保険を将来にわたる社会保障としてより一層活用できる。

21世紀の介護の心に求めたいものは、生命・自由・幸福の権利のみを追求するのではなく、日本が介護で植え継いできた福祉を、介護保険による社会連帯で分かち合い、植福していただきたい。介護保険時代に押し流されることなく、どのような時代にも適用する介護福祉学を探求することで、介護保険を将来にわたり持続可能な社会保障としてより一層に植福することがで

きるのです。介護には必ず光と陰を伴うも、介護の心によって、介護が素敵な思い出になります。日本介護福祉学会もあの素晴しい介護福祉学をもう一度創造してください。介護保険制度から介護サービスを追求するだけではなく、介護福祉学を介護の心で植福していただきたい。1993年10月23日に世界で初めて創設された介護に関する専門学会である日本介護福祉学会から、介護福祉学を創造することで、介護の心により福祉に寄与して植福に繋がることを祈念したい。

## 会費納入のお願い

本会は会員の皆様の会費により、運営しております。近年、会費未納により退会となる事例が問題となっております（会費を3年滞納された場合は、理事会の承認を経て退会処理となります）。

学会運営の健全化を導くうえでも、会員の皆様の会費の納入率の向上が必須です。どうぞ宜しくお願い致します。

正会員：9,000 円 学生会員：3,000 円

《会費振込口座》
◎郵便振替口座
00180-7-417389
加入者名：日本介護福祉学会
（他金融機関からのお振込みの場合）
〇一九（ゼロイチキュウ）店　当座　0417389
◎みずほ銀行 江戸川橋支店（545）普通預金
口座番号：1213646　口座名義：日本介護福祉学会
（ニホンカイゴフクシガッカイ）

本会の活動資金の大部分は、会員の皆様の会費によって成り立っています。学会の円滑な運営のため、ご理解ご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

▼お問い合わせ先▼
〒162-0801
東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター
日本介護福祉学会 事務センター
TEL：03-6824-9378，FAX：03-5227-8631
E-mail：jarcw-post@bunken.co.jp

# 編集後記

当学会は、本年6月に行われた理事・ 監事選挙により第11期の新役員体制となりました。

今期の広報委員は、二瓶さやか、内田和宏評議員、金山峰之評議員が担当致します。広報活動を通じた会員の皆様の活動促進、研究活動をふまえた交流、社会への情報発信等、魅力ある広報活動となりますよう、取り組んで参ります。

今日、めまぐるしく変化する社会情勢のなか、介護福祉をとりまく環境も多様に柔軟に変化していくことが求められています。今回、「私と介護」にて住居広士先生より頂きましたご寄稿は、介護福祉学とは何かについて立ち返る機会となり、未来に向けて介護福祉に関わる全ての関係者にエールを頂いたように思います。

介護福祉学領域からの情報発信の社会的責務はますます重要性が高まっているところです。新体制における学会の広報活動について、会員の皆さまより様々なご意見をお寄せ頂ければと思います。今後の広報活動について、ご協力をお願いいたします。

（二瓶）

第11期　広報委員会
理　事　　二瓶　さやか
評議員　　内田　和宏
評議員　　金山　峰之